

ギリシャの債務問題や米景気減速懸念が投資家のリスク回避志向を強める

2011年6月16日(木)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

ギリシャ問題に加え、米景気回復鈍化懸念等から欧米株は軒並み大幅反落

欧米株式市場は3日ぶりに大幅反落し、ほぼ全面安の展開でした。中でも下げを主導したのは銀行株でした。EU財務相会合でギリシャ支援に対する民間負担が合意に至らず、欧州当局者間の意見相違などによりギリシャへの追加支援の合意先送り懸念が広がり、ギリシャ国債利回りは過去最高水準を更新しました。ユーロドルも大きく下げました。また、ムーディーズはギリシャの債務へのエクスポージャーを理由にフランスの大手銀行3行の格付けを引き下げ方向で見直すとの方針を示しました。さらに、オズボーン英財務相が発表した金融規制改革案で、銀行に対して投資銀行部門とリテール部門の分離を求めるとの見方が広がったことも銀行株中心にマイナス材料でした。

米国株式市場もギリシャの財政問題への懸念に加え、米景気の先行き不透明感が高まりも投資家心理を冷やしました。6月のNY連銀製造業景況指数は▲7.79と予想(+12.50)に反して7ヶ月ぶりにマイナスとなり、前月(+11.88)より大幅に悪化しました。特に雇用指数が前回より半減したことなどから、雇用環境に対する先行き不透明感が一段と高まりました。また、5月のCPIは、食料・エネルギーを除いたコア指数が前月比+0.3%と前月(+0.2%)より伸び率が加速し、上昇率は08年7月以来最大でした。また、鉄鋼や自動車など個別企業の冴えない業績見通しが相次いだことも嫌気されました。

商品市場では金は続伸する一方、ドル高や景気減速懸念等から原油は急落し、銅などの非鉄金属も総じて軟調でした。欧州のソブリン問題や米国景気先行き不透明感が一段と高まる中、株安・商品先物安・債券高と投資家のリスク回避姿勢が窺われる相場展開でした。

欧米株安の流れを受けて軟調地合いの中、欧州ソブリン懸念が投資家のリスク回避志向を高める

欧米株安を受けて国内株は大幅安で始まりました。ほぼ全面安の展開で下落率上位には商品相場安を背景に資源関連セクターが目立ちました。また、対ユーロでの円高進行を嫌気して、電機など輸出関連株も総じて弱く、日本株の下げを牽引しました。ただし、欧州のソブリン懸念や米景気減速懸念等、先行き不透明感が強い中、市場参加者は非常に限られ、激しく売り込まれる様子も見られず、前場は終始9,500円を小幅に下回る水準で狭いレンジ内での推移でした。その後、官房長官が原発事償スキームをめぐり、国が金融機関に直接何かを求めることはないとの認識を示したと伝えられると銀行株は下げ幅を縮め、市場はこれをポジティブに受け止めました。しかし、後場に入りオランダ中銀総裁が欧州救済基金を二倍にする必要があるとの公算を示したと報じられるとユーロが急落し、投資家心理は急速に悪化しました。米株先物が急落し、高金利通貨も売られる中、主要通貨に対して円高が進み、日本株も一段と下げ幅を広げていきました。市場では日銀によるETF買い観測も根強く、9,400円近辺では先物の買い等が下支えしましたが、結局、日経平均株価は前日比▲163円安の9,411円と大幅に反落して引けました。本日は資源関連株や輸出関連株中心に全体の8割以上の銘柄が下落しましたが、その中で逆行高で推移したのが鉄鋼セクターでした。米鉄鋼大手が4-6月期業績について前年同期比で大幅増益となる見通しであることを公表しました。主原料である鉄スクラップ価格の上昇に対し製品への価格転嫁が進展していることが示され、これを好感した買いが優勢でした。以上